

アトムっ子園長の語るつばさ共同保育園の魅力

前川 良太

はじめまして。今年度から園長になりました、前川良太です。どうぞよろしくお願いいたします。アトムっ子が職員になり、親となって子どもを預ける保護者になり、ついに園長になってしまいました。

そんな私のアトムとの出会いは、教員として働く母が預け先を探そうと1歳になる直前の私を抱えて、当時無認可保育所だったアトム共同保育所に見学に行った時です。母は当時を振り返り「天使のような笑顔で赤ちゃんを抱くおーちゃん(当時の保母さん)を見て、ここに預けようと思った。」と話していました。その時のアトムとの出会いが今に繋がり、今年からここで園長として働くようになるとは、母も想像しなかった事でしょう。そしてアトムっ子だった頃の私の担任であった仲嶺前園長から襷を引き継ぐことが出来たことに喜びを感じると同時に、力量を越えたチャレンジに少し足がすくみながら新年度スタートの今日を迎えました。

自分自身のアトムっ子時代を振り返ってみると、思い出されるのはなにげない日常ばかりです。お昼寝の布団で遊んでいたこと。裏の土手で食べられる野草を探したこと。ビワの木やアスレチックに登って遊んだこと。竹馬を傷だらけになって練習したこと。思いつきケンカをしたこと。そんな原体験が私の根っこにあります。保育士として働くようになって気づいたのは、そんな何気ない日常の積み重ねこそ子どもの育ちに欠かせないのだということです。

よく保護者の人から「つばさは行事が少ない。親が成長を見られる場面が少ない。」そんな声を聞きます。確かに発表会もなければ、運動会もちょっと風変わりな4、5歳だけです。だけど実は何気ない日常の中に「子どもたちにこんな体験をさせてやりたい」と思い保育士が工夫を凝らした保育がちりばめられています。当日の為にパッケージされた行事ではなく、日常や過程にこそ“あそび”が生まれます。その“あそび”が子どもの今をより豊かにするのだと思うのです。

もう一つ自分の育ちを振り返って感じることは、地域の中で育ったなということです。共働きで忙しく過ごす両親でしたが、自分の居場所はあっちこっちにたくさんありました。アトムっ子時代、仕事で帰りが遅い日はよくアトムの知り合いや保育士の家に泊まりに行きました。小学校へ行ってからも学童保育所に通い、学童の後は近所の家で両親の帰りを待ちました。3年生から通い始めた地域のサッカークラブもそんな居場所の一つでした。家に居られない分、地域の人や場が、自分自身の居場所だったなと今になって思います。

そんな風に育った自分自身の事を、私は幸せだなと感じています。アトムっ子ならではの壁で(いつかその話もどこかでしょうと思います)で小学校生活は少し窮屈だったけれど、他にたくさん居場所があり、安心できる大人がたくさんいたからこそ今の自分があると思います。だからこそ思うのです。「1人で頑張る子育てはしなくてよい」と。

つばさの保育には派手さはないかもしれませんが、作り込まれた行事はないし、見栄えよりも子どものわちゃわちゃを楽しみます。そんなつばさの誇れるところは、子ども一人ひとりとことん向き合う所です。そして何より私の母があの時感じたように「あの人に預けたい」と信頼できる大人がたくさんいるということです。少しおせっかいでも子どもの為、保護者の為とその人らしい表現でグイッと踏み込んでくる、どうにも熱くるしい人たちです。それでも昨年度はコロナの追い打ちもあり、保護者と保育士の対話不足が表面化しました。だからこそ、ぜひとも今年度は、一歩踏み込む私達職員に負けじと保護者の皆さんもグイッと踏み込んで欲しいと思います。

孤独に抱えるとしんどくなるような瞬間が子育てにはたくさん訪れます。そんな時こそみんなで知恵も力も合わせて乗り越えていきましょう。私自身あの時の地域の大人のような存在であり続けたいと思います。皆さんもどうか、隣の誰かを支える存在でいて欲しいなと思います。そしてまた皆さん自身も隣の誰かに支えられてください。そのためにこれからいっぱい知り合いましょう。いっぱい泣いて笑って時にケンカしながら、仲間になっていく過程をともに歩みたいと思っています。どうぞ今年度もよろしくお願いいたします。